



## 警告のニューズレター「角笛」

発行日：2014年5月発行（第49号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「宮の崩壊」 エレミヤ

◎証「砕かれた心」 E3

◎お知らせコーナー 「新刊本の紹介」

### < 巻頭メッセージ >

「宮の崩壊」 by エレミヤ

本日は宮の崩壊として、再度このことを見ていきましょう。

### < 終末の預言は宮の崩壊から語られる >

主がマタイの24章で、終末の日に関して語られたことは私たちがよく知っていることです。そして、その時、記述の初めにまず宮の崩壊のことがらが語られています。以下の通りです。

マタイ24:1 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。

24:2 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」

24:3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」

このこと、終末の記述が宮の崩壊から始まっていることは、偶然とは思えません。何故なら、平行記事であるマルコや、ルカの福音書も同じ様に、まず宮の崩壊の記事から始まっているからです。ですので、このこと、宮の崩壊ということは、終末の日において、何か意味のあること、特別なことであることが想像できるのです。

### < 宮の意味合いとは何か？ >

聖書的に宮が崩壊するとは、どのような意味合いがあるのでしょうか？他の建物、たとえば、学校やオフィスの倒壊とは何か違った意味合いがあるのでしょうか？

このことを理解するために私たちは初めて神の宮、神殿が建設された時の記述に戻る必要があります。神殿はソロモンの時に建設されました。そして、それは豪華な、輝かしい建設物でした。そして、その宮には、以下の様に神の臨在が満ちていたのです。

“1列8:10 祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が主の宮に満ちた。

8:11 祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。”

です。聖書で言う宮、神殿の意味合いの重要性をまず私たちはよくよく理解しなければなりません。それは、神の民であるイスラエルの民の礼拝の中心であり、神に仕える民のもっとも重要な場所だったのです。

### <宮の崩壊の意味合いとは？>

さて、それでは、その宮、神殿が崩壊するとは、聖書的にどのような意味合いがあるのでしょうか？実はこのことも聖書に記述されています。以下の通りです。

1列9:6 もし、あなたがたとあなたがたの子孫が、わたしにそむいて従わず、あなたがたに授けたわたしの命令とわたしのおきてとを守らず、行ってほかの神々に仕え、これを拝むなら、

9:7 わたしが彼らに与えた地の面から、イスラエルを断ち、わたしがわたしの名のために聖別した宮を、わたしの前から投げ捨てよう。こうして、イスラエルはすべての国々の民の間で、物笑いとなり、なぶりものとなろう。

9:8 この宮も廃墟となり、そのそばを通り過ぎる者はみな、驚いて、ささやき、『なぜ、主はこの地とこの宮とに、このような仕打ちをされたのだろう。』と言うであらう。

9:9 すると人々は、『あの人たちは、エジプトの地から自分たちの先祖を連れ出した彼らの神、主を捨てて、ほかの神々にたより、これを拝み、これに仕えた。そのために、主はこのすべてのわざわいをこの人たちに下されたのだ。』と言うようになる。」

ここでは、「わたしがわたしの名のために聖別した宮を、わたしの前から投げ捨てよう。」として、神ご自身がその宮を投げ捨てる、すなわち、崩壊させることが語られています。そして、その理由として、「あなたがたに授けたわたしの命令とわたしのおきてとを守らず、行ってほかの神々に仕え、これを拝むなら」と語られています。すなわち、神の民が神のおきてを行わず、他の神々を拝むようになる時、別のことばでいえば、神の民が背教に入るとき、神は怒り、その宮が投げ捨てられ、崩壊することが語られているのです。

ですから、神の宮の崩壊ということに関する特別な意味合い、特別なことがらをよくよく理解しなければなりません。それは、偶然に起きるものでもなく、意味なく起きることでもないのです。逆にこのこと、宮の崩壊は、神の意思の現れであり、神がその民の背教に対して、怒り、明確に裁きを断行したその表れなのです。

福音書に書かれているように、「一羽の雀さえ、天の父の許し」なしでは地に落ちません。まして、宮は、神の意思がない限り決して崩壊することはないのです。

### <バビロンによる、宮の崩壊>

さて、このように、神により、語られた神の宮が、汚され、崩壊する日がやってきました。それは、バビロンにより、攻撃される日のことです。その日に関して聖書は以下の様に書きます。

2歴36:16 ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、主の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった。

36:17 そこで、主は、彼らのもとにカルデヤ人の王を攻め上らせた。彼は、剣で、彼らのうちの若い男たちを、その聖所の家の中で殺した。若い男も若い女も、年寄りも老衰の者も容赦しなかった。主は、すべての者を彼の手に渡された。

36:18 彼は、神の宮のすべての大小の器具、主の宮の財宝と、王とそのつかさたちの財宝、これらすべてをバビロンへ持ち去った。

36:19 彼らは神の宮を焼き、エルサレムの城壁を取りこわした。その高殿を全部火で燃やし、その中の宝としていた器具を一つ残らず破壊した。

ここでは、神の宮がバビロン軍により焼かれ、また、宮の器具が異邦の地であるバビロンに持ち去られたことが描かれています。その日、神の民であるユダは、光栄どころか、大いに恥を

受け、敗北を喫したのです。何故、彼等ユダの人々に対して、この様な悲惨な日が到来したのでしょうか？その理由として聖書は、「ついに、主の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった。」と書きます。すなわち、神の民の不信、不忠実に対して、神がもう耐えられなくなり、怒りが積み重なったからであることを語るのです。ですから、この日、バビロンによる攻撃によって起こされた宮の崩壊には意味があり、そのもっとも大きな原因、否、唯一の原因は神の民の背教に対して神の怒りが積みあがり、燃え上がったからなのです。

### ＜ローマによる宮の崩壊＞

さて、歴史は繰り返され、再度エルサレムの宮が崩壊する日が来るのが主により語られました。以下の通りです。

マタイ24:1 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。  
24:2 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」

主はこの日、ヘロデ王により、40年以上もかけて作られた神の宮が崩壊する日を預言しました。「まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」として、宮が徹底的に崩壊する日に関して預言したのです。しかし、何故、この壮麗な神殿は破壊されるようになるのでしょうか？

その理由は、かつてのバビロンの日と同じ様に、この時代の神の民、イエスの時代の神の民の不信、背教のゆえなのです。主はこの時代の人々の背教について以下の農夫のたとえで、はっきりと警告を行いました。

マタイ21:33 もう一つのたとえを聞きなさい。ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。

21:34 さて、収穫の 때가近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。

21:35 すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりには袋だたきにし、もうひとりには殺し、もうひとは石で打った。

21:36 そこでもう一度、前よりもっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。

21:37 しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう。』と言って、息子を遣わした。

21:38 すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』

21:39 そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。

21:40 このばあい、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。」

21:41 彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」

21:42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』

21:43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。

この農夫のたとえの様にこの時代の神の民であるユダヤ人たちは、主人により送られた神の一人子であるイエスさえ殺し、そして、結果、神の怒りをかうようになったのです。その結果、エルサレムは神の怒りにより、ローマにより蹂躪され、

また、宮も徹底的に破壊されたのです。その宮の崩壊は神が許したことであり、それは、冒流の神の民に対する神の怒りの表れなのです。エルサレムは、主の預言どおり、異邦人に蹂躪され、宮は崩壊しましたが、それは、偶然に起きたことではなく、逆に神のすさまじい怒りの現れにより、起きたことであることを理解しましょう。

### <終末の日のもっとも大きなできごとは宮の崩壊である>

繰り返すようですが、主はマタイ24章のいわゆる「終末預言」を語る時、まず、宮の崩壊から語り始めました。あたかもこのことが終末の日の大きな重要な鍵であるかのように聖書はこのことを強調するのです。ですので、終末の日に宮が崩壊する、ということは一体どのような意味合いがあるのか、それを私たちは真剣に理解すべきなのです。

繰り返していうようですが、宮の崩壊は、神の民の背教と密接に関係があります。バビロンによる宮の崩壊の時も然りであり、またローマによる宮の崩壊の時も然りなのです。

そして、主が終末すなわち、教会時代の終わりに関連してまず、宮の崩壊を語られたその主旨は何でしょうか？普通に考えるなら、それは、終末における新約の神の民、すなわち、教会の背教と密接に関係すると考えることが妥当と思われる。

このことは事実です。今の教会すなわち、信者にとり耳障りの良いことしか語られない教会ではあまりいわれないことですが、しかし、聖書は明らかに以下の様に世の終わりにおける教会の背教を預言しています。

2テサ2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

ですので、これらのことばを合わせて考えるなら、終末の日の宮の崩壊は神が新約の神の民、すなわち、教会のクリスチャンの不信に対して神が怒りを燃やしたゆえ、起きることが想像できるのです。

### <宮に関するたとえ>

さて、終末の日の宮の崩壊ということを考えてみると、大事なポイントは、現在のエルサレムにはもう、神殿は存在していない、ということです。AD70年にローマにより、宮が崩壊させられて以来このかた、この地には、神殿は存在しないのです。それどころか、宮があった場所には、イスラム教の寺院が建っており、建設する場所さえ存在しないという状態なのです。

このような現状、主のいわれた宮など、今は影も形もない、という現状を私たちはどう理解すればよいのでしょうか？私の理解はこうです。崩壊すると預言された宮が、今は影も形もないという現状を通して、神は私たちに対して、建物としての宮の崩壊、というより、たとえとしての宮の崩壊に関して目を留めるように語っているように思われるのです。宮のたとえとは、何でしょうか？それは、以下のことばから明らかです。

エペソ 2:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

2:21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

2:22 このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

ここに書かれているように、建物としての宮は、型に過ぎず、それは、新約における教会をたどえたものなのです。

### <一つの石も残されない>

主はその宮の崩壊の日に一つの石も残されな  
いことを語られました。以下の通りです。

**マタイ24:2** そこで、イエスは彼らに答えて言われた。  
「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まこ  
とに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずさ  
れずに、積まれたまま残ることは決してありませ  
ん。」

この箇所に関して上記エペソ書の「あなたが  
たは使徒と預言者という土台の上に建てられて  
おり、キリスト・イエスご自身がその礎石で  
す。」とのことばを合わせて考えるなら、それ  
は恐るべき預言であることに気づきます。それ  
は、教会崩壊の日を預言しているのです。すな  
わち、キリスト教会の土台である、使徒パウロ  
やペテロの教え、さらに預言者であるイザヤや  
エレミヤなどの預言書のことば、それどころか、  
隅のかしら石であるイエス・キリストの教えさ  
え、教会から取り除かれてしまう日が預言され  
ているのです。すなわち、終末のその日、キリ  
スト教教理のもっとも根本部分が崩壊する、と  
いう恐ろしい預言が語られているのです。

具体的には、イエスによる以外に救いはない  
との教えや、また、キリストの再臨も復活も、  
罪の許しなどの教えも皆、教会から取り除かれ  
ていくのでしょうか。

## <多くの終末のみことばは教会崩壊 の日を暗示する>

教会の根本教理が崩壊する日などは、決して  
望ましい日ではありません。しかしながら、こ  
のこと、すなわち終末の日とは、宮が崩壊する、  
すなわち、教会の根本教理が崩壊する日である  
ことを理解する時、実は多くの終末預言の謎め  
いたことばが理解できるようになるのです。た  
とえば以下のことばです。

**マタイ24:9** そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめ  
に会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あ  
なたがたはすべての国の人々に憎まれます。

ここには、世の終わりにはイエスの名のため

に全ての人々から憎まれるようになることが語  
られています。何故でしょうか？その理由はも  
う、その日には、イエスは救い主ではない、特  
別な人でも神の子でもない、と教会で大いに宣  
伝されるようになるからです。むしろ、いかさ  
ま師、カルトであるといわれるようになります。  
だから、イエスを信じる者はあたかもオウム真  
理教の様なカルト信者であるとして、憎まれる  
ようになるのです。

**マタイ 24:10** また、そのときは、人々が**大ぜいつま  
ずき、互いに裏切り、憎み合います。**

何故、教会で多くの人が信仰につまずくので  
しょうか。また、他のクリスチャンを裏切った  
りするのでしょうか？その理由はその日、宮と  
しての教会の教えや教理が崩壊し、聖書に書か  
れている使徒パウロの教えもイエスの教えもみ  
な、イカサマであり、インチキであるとの噂が  
大いに飛び交うからです。そして、そのために  
多くの人が信仰につまずき、正しい歩みをする  
クリスチャンを裏切ったり、密告するようにな  
るからです。

かくのごとく、多くの不思議な終末預言は、  
その日、宮、キリスト教会の根本教理が覆され  
るのであると理解する時、つじつまが合い、納  
得できるのです。繰り返しますが、主が終末の  
日に関連してまず、宮の崩壊から語られたこと  
には大いに意味があります。それは、神がその  
神の民への不信、不従順に対して、大いに怒り  
を発し、キリストの教会の土台、根本教理、教  
えが崩される日を預言したものなのです。

—以上—



宮の崩壊

本日は10年ほど前から何となく神さまから示されていることがありますので、そのことについて話をしたいと思います。

突然ですが、聖書には「永遠の命」を得るためのことに関しての事柄について書かれています。「そんなこと分かっているよ！」と言われる方も多いかと思いますが、よろしければみことばを見てみましょう。

**参照 ヨハネの福音書 5:39**

**5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。**

つい最近、こんなことを思いました。「どうしたら、永遠の命を得られるのか？」と。そして「神さまはどんなことを望んでいるのか？」と。その時に、上記のみことばを思い出しました。まさに「聖書」の中に答えがあるということ、です。

さて、本題に入りたいと思うのですが、以前チラッと話したかと思いますが、私はしばらくの間、教会や信仰生活から離れていました。でも、今から10年ほど前に神さまの憐れみによってクリスチャンの歩みを再スタートさせていただくことになりました。その時から、「永遠の命」について真剣に考えるようになりました。するとしばらくして、詩篇のみことばが目にとまりました。以下のみことばです。

**参照 詩篇 34:18**

**34:18 主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。**

この箇所を読んで、神さまは「心の砕かれた人」に目を留めておられ、そういう人と共にいてくださり、なおかつ救ってくださるのだ、ということを理解しました。裏返すと、心の頑な人とは、神さまが共におられない、もっと言うなら、そういう人は天の御国は

危ないのでは？と思いました。なので、日々の歩みの中で「砕かれる」ということを熱心に祈り求めるようになりました。それから神さまはありとあらゆる大事なことを示してくださるようになりました。その一部を紹介したいと思います。それは、「生まれつきのもとの分離する」というものです。これも聖書に書いていることなのですが・・・以下、イエスさまとニコデモという人の対話がそのことを証していますので、見てみてください。

**参照 ヨハネの福音書 3:1-6**

**3:1** さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。

**3:2** この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行なうことができません。」

**3:3** イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

**3:4** ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができますでしょうか。」

**3:5** イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。

**3:6** 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

下線の部分をご覧くださいなのですが、「新しく生まれなければ」とか「水と御霊によって生まれなければ」とあります。「水」と「御霊」すなわち「神さまの力」によって、生まれつきの良いものも、そうでないものも、変えられていかなければ「神の国を見ること」「神の国にはいることができない」ということをここでは言われているのです。神の国に入るために、「毎週礼拝に行っていれば、奉仕をこなしていれば・・・」とは書かれていません。

どうも、「新しく生まれる」ことにポイントがあるようです。もちろん礼拝に参加することも大事ですし、奉仕もしないよりは、したほうがよいと思います。ただ、その前に大事なことがあるのでは？と思います。それは「生まれつきのもの」から、少しずつ切り離されていく、ということです。そのことを抜きにして、天の御国に入る、ということは恐らくないのでは？と思います。「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることができません」「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません」と、聖書にハッキリと書いているのですから。そして「砕かれた心」となるためには、きっと「生まれつきのものを神さまに変えていただく」ということを熱心に求めていくことなのでは？と思いました。この10年間、様々なことがありましたが、そんな中であつても常にこのことに着眼して歩みをさせていただいたのですが、今現在もまったく同じ示しを神さまから受けています。このことを聖書の別の箇所では、「心と耳とに割礼を受ける」という表現をしていますが、大分前にも話をしましたように、「割礼」はクリスチャン生涯にわたってのテーマなのでは？という風に思います。

かつては多くの人を救いに導いた人とか、大伝道師とまで言われなくても、メッセージや証や預言を語る人とか、癒しの賜物を用いている人とかが、天の御国に招待されるのだと思っていました。もちろんこういう働きは素晴らしいと思いますし、天の御国に入った時には、大いなる報いを受けることになると思います。でも、それは「天の御国」に入れたら、の話であつて。「天の御国」は入ってなんぼのものであつて、いくら多くの働きをしても、あるいは賜物を用いて神さまのわざをあらわしたとしても、あわや入れなかつたら、どうにもならないので…それこそ、「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましよう。そのいの

ちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」なんていうみことばがあるので、何はともあれ、「天の御国」に入ることを真剣に考えなければ…と思いました。そのためには神さまの前に「砕かれた心」になっていくのが、とても大事なのでは？と思いました。そしてそれは、自分にとって都合の良いこともそうでないことも、神さまが言われることにすべて従っていくことではないのかな？と思いました。今回こんな風に証を書いていく中で、益々そのような志が与えられたように思います。最後に、みことばを読んで証を終わりにしたいと思います。

**いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。」**  
【イザヤ書57章15節】

いつも大切なことを語ってくださる神さまに栄光と誉れがありますように。

—以上—



<お知らせコーナー>



- ◆神により永続を約束され、万世一系が決して途絶えないことを約束されたダビデ王朝は、400年の歴史の後、バビロン捕囚を契機に歴史の間に消え、その行方はようと知れない。
- ◆全能の神、聖書の神の堅い約束、「ダビデには、イスラエルの家の王座に着く人が絶えることはない。」との約束は破られ、万世一系は、果たして途絶えてしまうのか？
- ◆バビロン捕囚により、ダビデ王朝が行方不明となったのは、今から2600年ほど前のことである。
- ◆その頃、東の島国において、万世一系の王朝が誕生する。
- ◆この王朝、皇紀2600年を誇る万世一系の天皇家こそ、ダビデ王朝の正当な後継者ではないのか？
- ◆人種、言語、文化、習慣、歴史、あらゆる面において、天皇家とダビデ王朝には、類似性がある

エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax: 020-4623-5255, メール [truth216@nifty.com](mailto:truth216@nifty.com)